

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520143
 研究課題名（和文）医事的教養と宮廷医の活動—中世医事書、特に医事説話をめぐって—
 研究課題名（英文） Knowledge and culture about medicine —in Medieval Japan—
 研究代表者
 美濃部 重克 (MINOBE SHIGEKATSU)
 南山大学・人文学部・教授
 研究者番号：90065475

研究成果の概要：当該の題目に関連して資料の調査・分析を行い、下記のように多岐にわたる研究を展開した。①「伝尸（屍）病」について、医術と呪術が交錯する領域に於いての資料の翻刻・紹介と分析を行った。②『医家千字文註』について、諸本の調査を行い、定例の研究会を開催して注釈を試みた。③宮廷医の活動に関わって「御薬」という行事についての研究を行った。④現代よりも広い病症を指した江戸時代の「疝の虫」について、その病症の広さや病因についての言説を分析した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学：中世文学

キーワード：医事的教養 宮廷医 説話 『医談抄』 『医家千字文註』 惟宗氏 伝尸病

1. 研究開始当初の背景

宗教史、古典文学研究、医学史は、それぞれ別途に行われがちであったが、近年では古典文学研究に於いては説話文学の研究者を中心に宗教と文学の接点に位置する作品の発掘や研究が行われつつある。仏教、神道また世俗世界に主題を得た説話、あるいはその集成書である説話集の研究はすでに多くのことがなされており、現在は密教の事相に関わる世界、聖教の世界に研究の中心が移りつつある。呪術師や宗教者の職能的な営みあるいは一般人の宗教生活また日常生活における神、仏、霊との神秘的な交渉が示すところ

の世界解釈および人間解釈の枠組みまたその具体的な様相は中世の文学ことに説話文学研究においてさまざまに研究されている。しかし、医学と関わる作品については、医学史の研究者から医学史的な研究がなされるのみで、治療と直接に関わらない医事的な言説についてはその意味を十分に分析されることもなく等閑に付されがちであった。

2. 研究の目的

信仰の世界は霊と人との関わる世界であり、不思議を不思議として認める認識に裏打ちされた世界といえよう。それに比して我々

の研究は、古代・中世において、既に物理的方面からの合理的認識が息づいていたことを実態的に明らかにするものである。我々は、文学・文化・心理の方面から従来の研究に新たな視界を開くことを目指している。我々の研究は、文学および文化の歴史の各時代に通底する合理的精神の在り方を解明する。本研究は、科学的で合理的な精神に裏打ちされる中世の医事的教養の具体相を明らかにすることで、中世文学ことに説話文学研究がこれまで形成してきたパラダイムをおし広げようとする研究である。

3. 研究の方法

(1) 医事に関わる説話と伝説、仮に医事説話と総称するとして、それらを日中の医学書、医事書を中心に、その収集を行う。収集したものについて、日中の医書や類書を参考にその整理と分類の方法を考える。それを通して仏教説話および神道説話また世俗説話の世界と対比することによって、その特質についての考察を行う。

そのために、武田科学財団杏雨書屋、内藤くすり博物館、国立公文書館などの資料所蔵機関に調査に赴き、原本を閲覧・調査し、写真などによって資料を集積する。

また学界に有用であると思われる資料については、翻刻紹介を行い、その性格や意味づけについての研究を行う。

(2) 鎌倉末期に編纂された『医談抄』『医家千字文註』の内容について、日中の医学書、医事書や中国の類書との比較研究を行う。医事説話の分析、あるいは中世の人々が医事説話集を編んだという事実を検討することを通じて、中世の人々がどのような精神世界を持っていたのかを考察する。そのために、『医家千字文註』の輪読会を定期的に行い、その訓釈と出典の調査、またそれぞれの説話に託された中世人の精神世界について討議を行う。また、それに先立って、『医家千字文註』の写本を調査し、本文の異同を確認し、校訂本文を作成する。

(3) 医家、中世の日記や文書また文学作品に現われる医家についての資料を収集して、中世における主として宮廷医の世界について研究する。医学史の側からの研究、歴史学の側からの研究を利用して、これまでのわれわれの研究に広がりとお興行を持たせて、宮廷医の活動を多面的かつ立体的に明らかにする。漢文日記を中心に手分けして資料のカード取りを行い、共同で分析する。

(4) 医事説話の世界は心理・文化的表象と

しての「虫」が問題となる。古典作品には古来、「虫」の描かれることが諸外国に比べて多いようである。江戸時代以前の日本人によって、心理・文化的表象としての「虫」について書かれた記述を収集し、それについて意味論的なアプローチによる研究を行う。具体的には医事的な知識でもあり、また庶民の間にもその存在が周知のものであった「疝の虫」についての研究を行う。

(5) 以上を背景に古代・中世の文学・文化に関わる諸文献に現われる医事的な記事に考察を加えることで、広い視野から中世における医事的教養の具体相を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 「伝尸（屍）病」についての資料を発掘・集成し、学術的に利用できる形での学界への提供とその分析を行った。

「伝尸病」は、従来、肺結核のこととされがちであったが、肺結核と同義ではなく、精神的な症状をも含み、またその原因として霊的なものが想定されており、治療に当たって医術と共に呪術的な営みもなされた、極めて興味深い病である。

伝尸病を引き起こすものは「鬼」または「虫」、もう少し言い方を換えると、「鬼」と「虫」の両方のイメージを帯びたものと考えられていた。また「業病」として理解される側面も持っていた。

そのような伝尸病の性格と呼応して、その治療には「虫」を殺す薬物の摂取や灸治などの医術的な手法と、宗教的・呪術的な修法による方法の両方が考えられていた。

伝尸病についての諸文献を検討して、その考証と、そのメカニズムを明らかにした論考を公にした。また、重要な資料である武田科学財団杏雨書屋蔵『伝尸病肝心鈔』について、関係の他文献と対校した形での翻刻を発表した。「5、主な発表論文等」の項の〔図書〕に示した業績を参照されたい。

(2) 鎌倉時代の医家、惟宗時俊による著作、『医家千字文註』についての基礎的研究を行った。

まとまった先行研究のほとんどない該書に関して、諸本の調査と現存写本の評価を行い、どのように撰者が千字句を作成していったかを考証し、論文として発表した。現存写本は、時俊写の原本の面影をかなりよく残すと思われる、文字の重複なく千字句を作成するために、時俊は様々な苦勞と工夫をしているが、版本や活字本ではそれが十全にはわからない。千字句は中国医書の引用からなる注目の標題的な役割を果たすものであり、この書

の眼目は注文にある。そのような点で、初心者向きの入門書というのとは、やや性格を異にしており、むしろ本書は術学的といってもよいような高度な作品である。この件については「5、主な発表論文等」の項の〔雑誌論文〕の項の2番目に記した論文を参照されたい。

また、注釈のために月2、3回の輪読会を行い、注釈的研究を行った。書き下しのない本作品について、訓点を施し、全編にわたって解釈を行い、また中国医書をはじめとする先行文献を調査し、出典を明らかにした。この成果については単行書として2010年春を目途に三弥井書店から出版する予定である。

(3) 鎌倉時代の日記を検討し、医家の活動や医事に関わる宮廷行事について考察を加えた。

その一端として、鎌倉時代の院の「御薬」行事についての考察を論文として発表した。「御薬」はもともと正月に典薬寮の医師が関与し、正月に屠蘇を飲む行事であったが、鎌倉期の院の御薬に於いては、医師の関与は見られず、院の私的な酒宴となっていたが、院周辺の間人関係に関わる重要な行事となっていた。そのあたりの事情を『とはずがたり』を題材に論文として発表した。「5、主な発表論文等」の項の〔雑誌論文〕の項の3番目に記した論文を参照されたい。

(4) 現代のそれよりも広い病症を指した「疝の虫」について、文芸作品や医書の記述を抽出して分析し、その病症の幅の広さや病因についての言説を検討した。

「疝の虫」という言葉は、現代では小児のごく限られた症状を指すに過ぎないが、江戸時代に於いては広範で多様な症状を指し示す一大症候群と呼ぶべきものであった。中国医書や中世以前の日本の医書では「疝」と「癩」は区別されていたが、江戸期の日本ではそれが同一視、行動されることが多く、また、幼時の「疝」が「癩」に変遷していくという考えも見られるようになった。「癩」は、身体的症状のみでなく、現在の「鬱」に当たるような精神的症状をも含んでいたが、「疝」と「癩」は心身双方にわたる病症と考えられていたのである。「疝」の病因としては「虫」や「積」などの複因論が想定され、病気の原因となる「虫」の姿を実見したという記述や「虫」の図像の例が多く見出せる。それは治療法の確立をめざすものであると同時に、治療の実効性を人々に指し示すものでもあった。

以上のようなことを、江戸期の文芸作品、医書などに於ける医師の言説など、幅広い分野の文献にあたって例を指し示した上で考

察した。「5、主な発表論文等」の項の〔雑誌論文〕の項の4、5番目に記した論文を参照されたい。

また、現在でも行われている疝の虫封じの宗教行事について山梨県昌福寺、茨城県大山寺に於いて実地に調査を行った。また、古くは「疝の虫」の特効薬として有名であった「孫太郎虫」についての調査を行い、その分析を行った。「5、主な発表論文等」の項の〔雑誌論文〕の項の5番目に記した論文を参照されたい。

このほかに北九州地方の夜泣きえびすと呼ばれる小児の夜泣きを止める民間信仰についての現地調査を行った。

(5) (1)～(4)の結果を総合して、医事に関わる日本人の向かい方を明らかにすべく、月例の研究会を実施し、討議を行った。その成果は単行書としていずれ発表する予定である。

また、江戸期の蘭学の隆盛、明治維新以後の西洋医学の導入と啓蒙によって、前近代にほとんどの日本人の常識であった五臓に人間の精神活動の中枢があるという考え方がどのように変化していくかを考察した。西洋医学の導入と、教育・啓蒙による普及によって、脳・神経が人間の精神活動の中枢であるという知識は急速に人々の間に広まった。そのことを示す言辭は、直接医学に関わる言説の中だけではなく、俗文学をも含む小説などの中の言辭などにも広く見出せるものである。それらの用例を収集・分析し、脳・神経中枢説の普及の実態と、その意味について考察した。その成果については論文にまとめ、雑誌に発表する予定で、現在校正中である。「5、主な発表論文等」の項の〔雑誌論文〕の項の1番目に記した論文がそれである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト、美濃部重克、辻本裕成 「「虫」観・「虫」像の変遷と近代化—「五臓思想」から「脳・神経」中枢観へ—(上)」 『アカデミア 人文・社会科学編』 査読無 89号 頁未定 2009/06 (現在校正中)

辻本裕成 「『医家千字文註』の基礎的研究」 『南山日本文化論集』 査読無 9号 19-36 頁 2009/03

辻本裕成 「『とはずがたり』の御薬一雅忠と通雅の参仕をめぐって」 『南山大学日本文化学科論集』 査読無 7号 25-42 頁 2008/03

長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト、美濃部重克、辻本裕成 「「疝の虫」考（下）」 『アカデミア 人文・社会科学編』 査読無 86号 53-131 頁 2008/01

長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト、美濃部重克、辻本裕成 「「疝の虫」考（上）」 『アカデミア 人文・社会科学編』 査読無 84号 60 頁 2007/01

〔図書〕（計1件）

美濃部重克、辻本裕成、長谷川雅雄、ペトロ・クネヒト 「伝尸「鬼」と「虫」－杏雨書屋蔵『伝尸病肝心鈔』略解－」（『唱導文学研究第六集』（福田晃・中前正志編 三弥井書店 321 頁）の 40-95 頁所収） 2008/01

6. 研究組織

(1) 研究代表者

美濃部 重克 (MINOBE SHIGEKATSU)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号: 9 0 0 6 5 4 7 5

(2) 研究分担者

長谷川 雅雄 (HASEGAWA MASAO)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号: 7 0 1 5 8 2 9 4 5

辻本 裕成 (TSUJIMOTO HIROSHIGE)
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号: 9 0 2 4 9 9 2 0

(3) 連携研究者

中根 千絵 (NAKANE CHIE)
愛知県立大学・文学部・准教授
研究者番号: 9 0 1 2 0 1 2 7